

気山「地域活性化プロジェクト」

福井県三方上中郡若狭町立気山小学校

福井県

1 テーマ

ふるさとの美しい自然を守り、つないでいく活動

2 活動の概要

（１）はじめに

気山小学校は福井県の南西部、景勝地である三方五湖や鳥浜貝塚、古墳群、熊川宿などの歴史的遺産がある若狭町の北西部に位置している。近くには、三方五湖の一つの水月湖から発見された「年縞」という地層が年代特定の世界標準に指定され、脚光を浴びている。学校がある気山地区は、豊かな自然に恵まれ、三方五湖の３つの湖（菅湖 久々子湖 水月湖）に接し、野鳥をはじめとした生物の宝庫となっている。「福井ふるさと学びの森」は、平成２６年に県で初めて若狭町気山に開設され、学校からは徒歩で約１５分のところにある。広葉樹を主とした自然林と人工林があり、ここで、様々な森の学習を行っている。また、校区には豊かな森とそこから流れ出す川、下流には湖があり、その先の日本海につながっている。

気山小学校の児童は、この恵まれたすばらしい自然環境を舞台に、地域の方々や研究機関の協力をいただき、「森と湖のつながり」の学習を行っている。

（２）活動の視点

- ① 自分たちが住む地域の豊かな自然を好きになり、大切に思い、命あるものを慈しむ気持ちを育てる活動の工夫
- ② 各活動における外部講師の方々の思いに触れ、自然環境を大切にする生き方を学ぶ工夫

3 活動計画

（１）全校での活動 「親子自然観察会」

（２）１，２年生の活動 「梅に関わる活動」

（３）３，４年生の活動 「アベサンショウウオの保全活動」 「コシアカツバメの観察活動」

（４）５，６年生の活動 「森の学習」「川の学習」「湖の学習」 「稲作体験学習」

4 活動報告

(1) 全校での活動

○親子自然観察会

① 目的

- ・カヤ田の生き物を親子で観察することを通して、季節による自然のすばらしさを体感し、環境を守ることの大切さを理解する。
- ・これまでの生活科や総合的な学習の時間で学んだことを生かした取り組みや今後の学習に生かすための取り組みを行う。
- ・地域の自然を知ることによって改めて地域の良さを再確認するとともに、親子や家族がともに自然について関心をもつ一助とする。



② 内容

毎年行われている、恒例の親子行事である。校区内にあるカヤ田を会場に親子で水生生物の観察を行っている。校区の方が手入れをしてくださっている田んぼとハスプロジェクト推進協議会の皆さんが古代米を育てている田んぼの2か所で行った。活動が始まると親子で思い思いに生きものを捕まえた。ダルマガエル、ホトケドジョウ、シュレーゲルアオガエル、コオイムシ、アカハライモリなど、身の回りではなかなか見ることのできなくなった生き物を多数観察することができた。最初は生き物に触れることができなかった児童も、回数（年数）を重ねるにつれ、手のひらにのせて楽しそうに観察することができるようになっていく。どちらの田んぼからも親子の楽しそうな声が聞こえてきた。



若狭町において環境保全や環境教育に取り組んでおられるハスプロジェクト推進協議会の皆さんに講師として毎年お世話になっている。今年も親子で捕獲した生き物の名前とその生態について、詳しく教えていただいた。中には、最近では見られなくなった希少生物も多数みられ、気山の自然の豊かさについて学ぶよい機会となった。



③ 児童の感想

子どもたちは、活動の前に自然観察会に向けた「自分のめあて」を決め、それに対するふり返りを感想にまとめる活動をしている。また、保護者からは、ふり返りアンケートの中で、自由記述で感想をいただいている。

<児童>

- ・「いろいろな生き物をつかまえて、しっかり観察しよう」というめあてを達成できました。
- ・親子でたくさんの生き物を見つけられたことが、心に残りました。
- ・泡がプクプクしているところをアミですくったら、ホトケドジョウをつかまえることができました。
- ・めずらしい生き物をたくさん見つけることができ、良かったです。今年は生き物を触ることができました。
- ・ハスプロの人が説明してくれたダルマガエルは、ぼくがつかまえたので、ぼくはみんなに貴重な生き物を紹介できたと思います。
- ・カヤ田には、たくさんの絶滅危惧種がいることが分かったので、その生き物をこれからもずっと守っていきたいです。



<保護者>

- ・我が家では雨が心配で、前日の夜から子どもたちと「てるてる坊主」をいくつも作り自然観察会を待ちました。今年もたくさんの発見があり、雨の中での生き物の様子も学べました。雨の中での活動は大変でしたが、楽しかったと思います。
- ・親子で田んぼに行くこともなく、じっくり自然に触れることもないので、とても良い経験だったと思います。雨降りでしたが、それもまた自然で、子どもたちも楽しかったと思います。このような自然とのふれあいも今だからできることだと思い、今後も続けてほしいです。
- ・県内でもここだけとか、貴重な生物が多くいることが分かりました。高学年になると、説明がなくても名前が分かるなど、毎年の経験が知識につながっているとと思いました。



④ 講師紹介

「三方五湖と周辺里地の自然の再生」、「自然とヒト、ヒトとヒトのつながり（ネットワーク）の再生」を目的として、平成16年に設立されたハスプロジェクト推進協議会の皆さんに毎年お世話になっている。

(2) 1, 2年生の活動

【梅に関わる活動】

① 目的

- ・地域の特産物である梅の収穫を体験したり、身近な人から説明を聞いたりすることによって地域のすばらしさについて学ぶ。
- ・収穫した梅を加工（梅ジュースづくり）する活動を通して、産業について学ぶ。



② 内容

児童の祖父母が育てている梅園に、ご厚意で招待していただいた。2年生は2度目、1年生にとっては初めての体験である。最初、梅もぎの説明を聞いた後、早速各自がたわわに実った梅の実の収穫体験を行った。自分の手が届くところに本当にたくさんの梅の実が実っている様子を初めて見た1年生は、とてもうれしそうに収穫



していた。大きなビニール袋をもって一つずつ丁寧に収穫していたが、あっという間に袋がいっぱいになった。

高いところにある実は、おじいさんやおばあさんが、優しく枝を引き寄せてくれ、時間いっぱい交流を楽しむこともできた。

コンテナにいっぱいの梅の実を収穫し、最後にみんなそろって写真を撮って終了した。



学校に持ち帰った梅は、1人ずつ家庭に持ち帰ったり、生活科の時間に梅ジュース作りに使ったりした。

収穫の翌日は、梅ジュース作りに挑戦した。最初、梅のヘタを取ってきれいに洗い、キッチンペーパーで水気をふき取った。その後、竹串で梅の実を何か所も刺しながら、梅の果汁が出やすくして、氷砂糖と梅を交互に重ねながら



瓶に入れていった。約1カ月で飲めるようになり、夏休み前に試飲したがとてもおいしかった。

2学期は、暑い日にみんなで飲んだり、陸上記録会の練習をしている高学年にふるまったりした。高学年から「おいしかったよ」と言われると、みんな満足そうにしていた。収穫



から加工までの活動を通して、とても良い体験となった。

③児童の感想

<お礼の手紙より>

- ・たいせつなうめをとらせていただいて、ありがとうございました。うめは、すごくいっぱいとれて、とてもうれしかったです。
- ・いえにもってかえったうめで、うめジュースを作らせてもらいます。いっぱいもがせてもらって、とてもうれしかったです。
- ・らいねんもとらせてもらいたいなあとおもいました。ありがとうございました。
- ・うめをいっぱいとらせていただき、ありがとうございました。らいねんもいっぱいとれるといいなあと思いました。
- ・ぼくはうめが大すきなので、いっぱいとらせてもらって、とてもうれしかったです。



<おうちの方より>

- ・いただいた梅で、親子で梅ジュースを作りました。出来上がるのが今から楽しみです。子どもと一緒に待ちたいと思います。
 - ・地域の方のやさしさと自然に触れながら、いろいろな体験ができとてもうれしいです。ありがとうございました。
- ・子どもたち、とても楽しかったようです。家に帰ってからいろいろと話をしてくれました。子どもと一緒に梅ジュースを作りましたが、親は、別の飲み物も作らせてもらいました。おいしくできるといいなあと思います。

□講師紹介

今回お世話になったのは、2年生児童の祖父母である。若狭町は、福井県の中でも梅作りが盛んで、三方五湖の周りにはたくさんの梅園がある。2月の下旬より花が咲きはじめ、3月の上旬には満開を迎える。梅干しや梅酒なども有名で、観光地や売店でも販売している。



<講師の手紙より>

収穫した梅を、学校では梅シロップされたと聞きましたが、お家ではどうされましたか。梅シロップまたは梅干しかなあ。できあがりを楽しみですね。おじいちゃん、おばあちゃんたちが、「来年の事を言うと鬼が笑う」とよく言いますが、来年も梅もぎ体験に来てください。お待ちしております。（一部抜粋）

(3) 3, 4年生の活動

【アベサンショウウオの保全活動】

① 目的

アベサンショウウオと、アベサンショウウオの生きる里山の環境を守ろう

② 内容

アベサンショウウオは、日本産の小型サンショウウオ類であり、サンショウウオの中でももっとも分布域がせまく、京都府下丹後地方、兵庫県下但馬地方、福井県北部の、きわめて狭い地域にしか生息していない。大きさは約 10cm、しっぽはいちじるしく扁平している。背中は暗褐色、腹は淡褐色で、青白色の小点を密に散布している。

生息環境は森林内部で、涸れることのない湧き水のあることが必要条件となる。溝の中や落ち葉の下などに潜んでいる。成体はミミズやクモなどを、幼生は水中の小さい節足動物などを食べ、共食いもする。産卵は林内や、林縁の水たまりや溝の中で行われるが、湧き水があり、泥底で落ち葉や枯れ枝などの堆積物がある環境が、産卵場所である。

第1回 令和元年6月4日（火） 若狭町内 アベサンショウウオの生息地

- ・アベサンショウウオが生息しているU字排水路溝後背地と杉植林の林床や各排水路の産卵地の調査



第2回 令和2年1月22日（水） 気山小学校ランチルーム

- ・観察のまとめ
- ・アベサンショウウオの形状、重要性、保全の必要性を学ぶ。
- ・アベサンショウウオ生息地の環境変化を知る。
- ・冬季産卵調査の結果報告。

③ 児童の感想

- ・ いっぱい生き物がいて、アベサンショウウオが 14 匹ぐらいいて、うれしいです。あとドジョウも捕れてうれしいです。
- ・ カニはアベサンショウウオを食べるのでにがしました。
- ・ アベサンショウウオっていう生き物は知らなかったけれど、絶滅危惧種だと分かって大切にしようと思いました。
- ・ ちょっとしか生き物に触れられなかったけれど、今度行くときはいっぱい触れられるといいなと思った。
- ・ カメを触って、顔を見たらかわいいなと思いました。
- ・ トノサマガエルを捕まえられてうれしかったです。アベサンショウウオもかわいかったです。
- ・ 少しずつ増えていき、絶滅しないでほしい。いっぱいアベサンショウウオが見られてよかった。
- ・ はじめてアベサンショウウオの赤ちゃんを見られてうれしかったです。とてもかわいかったです。大きくなったらどの位の大きさになるのかなと思いました。
- ・ ゴミがいっぱいあったけれど、そうじしてきれいになってうれしかったです。来年、卵から生まれた子どもを見てみたいです。
- ・ 私は初めてアベサンショウウオを見ました。プニョプニョしていました。とてもかわいかったです。みぞ掃除をしたらくさんゴミがあったので、きれいにできるようがんばりました。
- ・ 見たことがなかったから、見られて良かったです。もっとアベサンショウウオの数が多くなってほしいなと思いました。元気でいてくれたらいいなと思いました。

④ 講師紹介

環境省希少野生動植物種保存推進員 長谷川 巖 氏
福井県両生爬虫類研究会員内部講師 奥野 宏樹 氏

【コシアカツバメの観察活動】

① 目的

小学生がコシアカツバメの観察をすることによって、地域の豊かな自然環境を認識し、環境保全に対する関心を高めるとともに、希少生物（コシアカツバメ）の保全を推進する。

② 内容

福井県は「絶滅のおそれのある野生動植物」の改訂版を平成 28 年 3 月に刊行している。その中で、コシアカツバメは「県域準絶滅危惧種」に指定されている。このコシアカツバメは、県内や北陸地方で近年減少しており、小学生がそれを認識し保全を推進することは意味深いことである。

気山小学校の校舎に、毎年コシアカツバメが営巣しており、観察することが容易であり格好の環境学習の教材である。そこで、児童が生態や観察方法について学ぶとともに、観察を通して環境保全の大切さを感じてほしい。

コシアカツバメは5月初旬に渡ってきて、5月から6月にかけて子育てをする。抱卵期間は14日から20日間、孵化から巣立ちまで、23日から25日である。よって、観察期間は5月下旬から7月上旬までである。

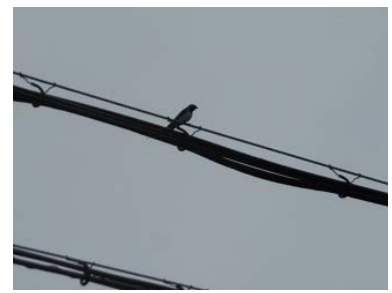
第1回 令和元年5月31日（金）気山小学校ランチルーム

- ・コシアカツバメとは、どんな鳥か。画像で解説を受ける。
- ・他のツバメとの違いは何か。特徴は何か。
- ・実際に、コシアカツバメの巣を観察しよう。校舎に営巣している様子を見る。
- ・双眼鏡や望遠鏡で、様子を観察する。



第2回 令和元年6月14日（金）気山集落内、県立美方高校

- ・気山の集落を歩いて、ツバメの巣を探そう。
農作業小屋の中に巣を発見。この小屋は、ガラス窓の一枚が外されており、そこからツバメが出入りをしている。
- ・JR気山駅のトイレに巣を発見。
- ・ツバメが泥と枯れ草をくわえて巣にやってきた。泥を丸い粒にして巣に付けている。
- ・美方高校でも、気山小学校と同じようなところに営巣している。
- ・違いは、美方高校のは「コロニー状」である。
- ・コシアカツバメとツバメの巣の形状の違いを観察。



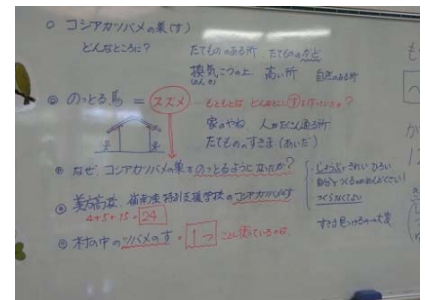
第3回 令和元年6月25日（火）宇波西川にかかる橋の裏、気山小学校児童玄関

- ・イワツバメの巣の観察しよう。
- ・巣に出入りするコシアカツバメの親鳥の様子を観察しよう。
- ・ストップウォッチで、その時間の間隔を計測しよう。
はじめは警戒してなかなか巣に入らなかったが、静かに観察しているとどんどんやってくるようになった。
- ・ヒナはほとんど顔を出さなかったが、まれに顔を出すとかわいくて児童は歓声を上げた。



第4回 令和元年7月2日（火）気山小学校ランチルーム

- ・観察のまとめ
- ・ツバメ3種の棲み分けはどうなっているのだろう。
- ・コシアカツバメが住み続けるために必要なことは何だろう。
- ・三方五湖周辺で見られる貴重な種の野鳥を知る。山奥に住んでいるというより里山に住んでいる。
- ・人が住む「里山」に貴重な野鳥が住むのはなぜだろう。
- ・すみかと餌があることが大切である。
- ・コシアカツバメが学校周辺に住めるのは、水田がありエサとなる昆虫が豊富で巣材となる泥もあるので、運んで来ることができるからだということが分かった。



③ 児童の感想

- ・巣の材料は土や泥や枯れ葉。コシアカツバメのエサは小さな虫。わたしは、コシアカツバメは自然豊かなところに巣を作ることが分かりました。
- ・わたしは、コシアカツバメの巣が、スズメに乗っ取られているので、乗っ取られないように守りたいです。
- ・わたしは、コシアカツバメが飛んでいる虫を食べるということをはじめて知りました。
- ・いろんなツバメがいるのが分かりました。イワツバメはすごいところに巣を作るのが分かりました。イワツバメの巣はツバメの巣と似ていることが分かりました。ツバメの巣の一つ一つに、土がとても多くて、作るのが大変だなと思いました。
- ・わたしは、はじめのところで一番右側の鳥の名前は分からなかったけれど、イワツバメということが分かったので勉強になりました。わたしは、ランチルームの近くに巣があるのが分かりました。

④ 講師紹介

日本野鳥の会 福井県副代表 小嶋 明男 氏
日本野鳥の会 福井県理事 武田 真澄美氏

(5) 5, 6年生の活動

【森の学習】

① 目的

- ・植物の生態系の基礎について体験活動を通して学ぶ。
- ・自然環境を守る上での森の役割を学ぶ。

② 内容

県で初めて指定された福井ふるさと学びの森に出かけ活動している。福井県大飯郡の名田庄を拠点に活動されている森林インストラクターで、NPO 法人森林楽校・森んこの代表をされている萩原茂男氏を講師としてお迎えし、森の空気をいっぱい吸いながら、自然観察をし、虫さがしや木の実拾いなどの活動をしている。森が、降ってきた雨を貯えるダムの役割をしていること（森のダム）や落ち葉や足元の土には動物の糞尿や死がい等が分解されてできた養分がたくさん含まれていることを教わった。また、時には、森の中を散策し、所々で危険性や楽しみ方を教わったり、豊かな森を維持するための間伐作業や枝打ち作業を実際に体験したりしている。このように森の中での活動で森に親しむ気持ちを育てることができている。



③ 児童の感想

- ・ふだんは来ることのない山の中で、はじめは怖い感じがしていましたが、萩原さんから森の中の楽しい活動を教えてもらって、次に来ることが楽しみになりました。
- ・ぼくたちの知らない間に、山の中をきれいにしてくれている人たちがいることを知りびっくりしました。おかげで、こうして森の中で学習することができると思いました。
- ・木を切る作業を体験でき楽しかったのですが、大変な仕事だなと思いました。

④ 講師紹介

里山ねっこ代表 萩原茂男氏

☆NPO法人 森林楽校・森んこ 代表

☆わかさネイチャーゲームの会 代表
☆若狭林業研究グループ協議会 会長
☆福井県里山里海湖研究所「ふるさと研究員」

【川での学習】

① 目的

川での生き物調査をすることで、森や山々とのつながりを学びその大切さを学ぶ

② 内容

学びの森や周りの山々からの養分をたくさん含んだ水は、宇波西川を通じて湖に流れ出す。その宇波西川の中流に出かけ、里山里海湖研究所の方々にお世話になり、生き物調査を行った。そこで、きれいな水にすむと言われる「サワガニ」「トビケラ」「ヘビトンボ」の生き物を見つけた。また、「アカザ」や「タカハヤ」などの川魚や、「コオニヤンマのヤゴ」や「アカハライモリ」も確認できた。

川の近くの木の枝には「モリアオガエル」の卵もあり、オタマジャクシになって木の下の方を泳いでいた。他にも、川の中にあるぬるぬるした石の表面を削り落とすと、「ヒラタカゲロウの幼虫」も見られるなど、多様な生き物が住んでいることが学習できた。



④ 児童の感想

- ・めずらしいアカザという魚を3匹も見つけることができて、やっぱり、宇波西川はすごいなと思う。
- ・今は当たり前のように自然と触れ合えているけれど、これからも自然を守っていきたい。
- ・去年体験したときには見られなかった生き物をつかまえることができて、とてもうれしかったです。

④ 講師紹介

里山里海湖研究所…平成25年9月に福井県で「SATOYAMAイニシアティブ」

「国際パートナーシップ第4回定例会議」が開催され、この会合で、県民の里山里海湖保全の意識醸成が一層図られたとともに、福井の里山里海湖の魅力と保全・再生に取り組む人々の活動が世界に広く発信されたことを機に福井県が平成25年10月30日に開所した施設。そこで研究されている小嶋明男氏、武田真澄美氏を講師としてお招きしている。

【湖での学習】

① 目的

湖での生き物調査をすることで、川や森、山々とのつながりを学びその大切さを学ぶ

② 内容

宇波西川の下流にある久々子湖で里山里海湖研究所の先生にお世話になり、生き物調査を行った。日本海につながる久々子湖は塩分を含む汽水湖なので、海の魚の子どもがたくさんとれた。また、モクズガニや大きなスズキも見つけることができた。ラ・しじみの田辺さんには、シジミ採りの体験をさせていただくことができた。



③ 児童の感想

- ・約40分の体験でたくさんのシジミがとれた。久々子湖は宇波西川とつながってるが、環境が異なるのですんでいる生き物が全く違うことが分かった。
- ・このように、森から流れ出す水や含まれている養分が、つながっている川や下流の湖、海の生き物を育む源になっていることが分かった。

④ 講師紹介

ラ・しじみ…福井県認証「コミュニティービジネス団体」で、ラムサール条約に登録された三方五湖の一つである久々子湖を拠点に、漁業体験や刺し網漁体験、ストラップづくりなどができる施設。代表：田辺義郎氏

【稲作体験学習】

① 目的

主食として日々食べている米であり、校区にも多くの田が広がっている。一方で、機械化や大規模化が進むことで、実際に稲作をしている家庭が減少し、ほとんどの児童が稲作の経験がない。5年生の社会科で稲作について学習するが、実際に米作りを一部だけでも経験することで、自然の恵みに感謝する思いを育てる。

② 内容

学校に隣接する田で専業農家の方にお世話になり、田植え体験と稲刈り体験をさせていただいている。田植え体験では、稲の生長について学んだあと、実際に「田植え定規」を全員が交代しながら使い、植えるための目印を付けてから、列を作って苗植えをした。

稲刈りまでは時々観察に行き、生長過程を見守る。秋の収穫時には、稲刈り鎌を使って刈り取りし、はさがけをして乾燥させ、腐ったりカビが生えたりしないようにすることも経験する。はさがけ乾燥は、機械乾燥に比べて「ゆっくり乾燥するので割れ粒発生や味の低下が少ない」こと、「穂の形が残ったままで乾燥するので後熟が進む」こと、「省エネルギー乾燥である」ことも教わった。



③ 児童の感想

- ・田植え定規を使って印をつけるのが難しかったです。一緒に枠を回す人と調子を合わせて進めないと曲がってしまうので気を付けました。

- ・僕たちが苗を植えたのは広い田んぼの一部だけだったのに、ずっと腰をかがめていたから、辛かったです。昔の人はすごく大変な思いをしてお米を作っていたんだと思います。
- ・おいしいお米を毎日食べることができるのは、安全においしいお米を作ってくださいの方がおられるからだと感謝したいし、この豊かな自然を大切にしたいです。

④ 講師

田中正志氏（町教育委員 地元の専業農家）

【しめ縄作り体験学習】

① 目的

- ・年始を飾るしめ縄作成を教わることで、伝統文化に触れる。
- ・児童が作成したしめ縄を地域の独居老人宅に届けることで、地域の方々とのつながりを深める。

② 内容

稲作体験学習で稲刈りした際にできた稲わらを使い、地域の方々から正月用のしめ縄作りを教わり、できたしめ縄を地域の独居老人宅に届ける活動。毎年、6年生が参加し、実施している。しめ縄をお届けする際には、地域の民生委員の方々にもお世話になっている。しめ縄が届けられた方々からは、お礼の年賀状が届くなど、心の温まる活動になっている。



③ 児童の感想

- ・はじめは難しそうで、私にはできないかもしれないと思っていただけたけれど、とてもわかりやすく、丁寧に教えていただいたので、上手にできたと思います。
- ・昔の人は、いろんな物を無駄にしないで、生活の中に利用していたので、ぼくたちも見習わないといけないと思いました。

④ 指導者（地域の方々）

杉浦惣治様ご夫妻、堀田稔様

5 まとめ

川や森、湖、日本海が校区内や近隣にあるという大変自然に恵まれた環境で子どもたちは暮らしている。しかし、小さい頃から当たり前になっていて、その環境の素晴らしさに自ら気付く児童は少ない。そこで、数十年前に始まった親子自然観察会をはじめ、様々な活動を意図的に継続し、その結果として、自分たちの身近な生活の中に自然を感じ、大切に思う心と態度が培われている。

上記の活動以外にも、給食の時間（本校は全校でランチルームにて昼食）を利用し、「自然のおたより」と題して、スピーチ活動をしている。その内容は、児童が日々の生活の中で見つけた季節に関わることを全校児童に報告するというもので、季節を意識的に感じる心を育てることや表現力向上もめざしての取組である。例えば、「登校中に蛇の脱皮した抜け殻を見つけました」とか、「カマキリが共食いをしている所をみました」、「うろこ雲を見ました」とか「大量のカメムシがいました」など、児童が少し驚いたことであつたり、季節を感じることであつたりという内容である。友だちと一緒に見たときには、一緒にスピーチをすることもあり、前に出やすい雰囲気大切にしている。また、グラウンドの横の畑にさつまいも園を整備し、全校を縦割りにグループ分けをして、さつまいもを育てて収穫する取組も行っている。収穫し、全校で焼き芋を味わうことも子どもたちの楽しみになっている。



以上のように、本校の子どもたちが豊かな自然を活用し、多くの活動に取り組むことを通して、自分たちが生活している気山地域の良さを全身で感じ、大切に思う気持ちを育んでいると信じている。平成30年には、「学校の森 子どもサミット」全国大会に福井県代表校として参加し、いくつかの活動を紹介した。また学年末には、地域や保護者の方々を招いての活動紹介も行った。そういった活動も、子どもたちの中に大きな思い出として残り、故郷を大切に思う心と自分の地元へのプライドが培われたと思う。保護者の多くは、自身の小学生時代を思い出し、自然の中での活動を懐かしく感じているようである。

令和になり、環境教育に関する大変うれしいニュースが届いた。一つは、本校のPTA活動が自然観察会等での永年の功績が認められ、文部科学大臣賞を受賞したことである。そしてもう一つは、本校の6年生児童が1年生の時から継続してきた野鳥の観察の研究が、福井県小中学校「私たちの理科研究」において優秀賞に選ばれ、福井新聞社の「小中学生科学アカデミー」では最優秀賞に選ばれたことである。

今後も引き続き、地域や保護者の方々との意思疎通を大切にしながら、次の世代に豊かな自然を伝えることを当然のこととして考える子どもたちの育成を目指し、活動を進めていきたい。